監修者のことば

「海外で臨床するには，まずは英語が流暢にしゃべれるようにならなくては…」．こう思っている方，結構多いのではないのでしょうか．もちろん，できるならそれに越したことはありません．でも，**意外と大丈夫**です．

かくいう私も，アメリカでの臨床研修を始めたときは，かなり英語で苦労しました．TOEFL iBT の Speaking は 30 点満点中 20 点（たしか）．ご多分に漏れず，**Reading** と **Writing** はある程度できていたものの，**Listening** と **Speaking** は「これはやばい」と自分で感じるレベル．渡米して最初の半年くらいは一生懸命，映画やドラマを繰り返し観てリスニングを鍛え，役になりきってはシャドーイングをして英語脳と舌を鍛えました．

渡米して最初の教材は『**The Departed**』．なぜこれを選んだのかは今となっては謎なのですが，たぶん近くの drug store で安売りの DVD があったから．あるときは Leonardo DiCaprio，またあるときは Matt Damon，たまには Jack Nicholson（これが難しかった）になって，彼らの発音やイントネーションをモノにできるまで，（多くの場合は 1/2 倍速のスローモーションにして）繰り返し練習したものです．結果，今でもこの映画は私にとって思い出深い名作の 1 つです．そのあとは『**Grey's Anatomy**』に移行するのですが，確か Season 6 くらいまでは観たかな…，最初のほうは面白かったんですけどね．いつまで研修医やっているんだよと（どうも Season 9 で attending になるようですね）．

何がいいたいかというと，1 つは，

英語が流暢でないことをそこまで恐れることはない

ということ．臨床現場でもネイティブでない医療従事者はたくさんいますし，意図が伝わればなんとかなります．真摯にコミュニケートをする姿勢と積極性が，正しい文法や発音よりも大事なのかなと思います．もう 1 つは，本書の中にもありますが，

結局は英語を使わないと上達しない

ということ．恐れずに，まずは英語環境に飛び込んでみる．その中で，英語縛りで生活することが何よりの近道です．

実際の臨床現場では，複雑な文法や文章構成を必要とはしません（もちろん医学英語は必要です）．むしろ，臨床現場で使う「型」や略語，独特の言い回しを覚えるほうが重要です．「カテ」「心タンポ」「ムンテラ（今は IC ?）」「血培」などなど，日本でも略語ばかりですよね．ぜひ本書の中に出てくる表現や tips を読んでいただき，臨床英語の“感覚値”を掴んでみてください．

Best of luck !!

2020 年 3 月吉日

シリーズ監修　反田 篤志